

## 震災ボランティア北埼玉版

## 「陸前高田へ行こう！」報告

行田市立見沼中学校 鈴木紀久夫

11月25日夜出発、26日夜到着の「弾丸ツアー」による震災ボランティアの取り



参加者集合写真

組みを私たちの支部は、成功させました。バス1台をチャーターして、中学生、高校生、大学生10名を含め、20代から50代の教員とその家族、総勢39名の参加でした。夜行バスによる強行軍のボランティア体験でしたが、それぞれに大きな感動や思いを深くして帰ってきた体験でした。

例えば、陸前高田市の出身で実家は、母が20数年前埼玉に来てから無人ではあったが、毎年お墓参りに帰省していた私にとつては、3月11日は人生最大のショックであり、毎日報道される死亡者名や被害の実態を涙を流しながら見ていた毎日でした。海から約2km離れた我が家も流されたことを知ったのは、テレビの、避難所のインタービューで隣のおばさんが息子さんの名前を叫びながら答えてい

たのを偶然にみて知った状況でした。

被災地に最初に帰れたのは、やつのことでガソリンを携行缶に詰め、援助物資にと米と携帯カイロを積んで行った3月下旬でした。その時の故郷の変わり果てた状況は、忘れることでできませんでした。その後4月の連休の帰省で、避難所にいた近所の方への激励やお見舞いを経ながら、夏休みには娘と共に3日間のボランティア活動（主に青空市での被災者への物資の配布など）にも参加していました。

その間北埼玉支部では何人かの仲間が、全教・埼教組の呼びかけに答え宮城県石巻市でのボランティア活動に参加したり、家族と共に他の被災地を巡りながらボランティア活動に参加した仲間もいました。2学期になって様々な活動に取り組みながら、「何かやりたい」と思っているが、自分だけではできない」という声に答えよう、支部の取り組みとして教職員に呼びかけるボランティアを考えようという趣旨で、「支部長の故郷に行こう」と固まってきました。忙しい教職員の生活の中で、多少無理もしながらバスを1台貸し切って職場でもピラで知らせながら、大きな構えで30人を目標にしてやる

うということになりました。そして9月の支部委員会で実施時期も希望を取りながら、11月の後半の冬を前にしたギリギリという時期になりましたが、実行に移すことができました。

現地にはちようど夜が明け明るくなつた頃到着しました。唐桑半島を過ぎて、広田湾が見えてきました。海は青く美しいままだつたこと、そして跡形もなくなつた「道の駅」案内看板が今でも普通に通道の途中にあるのが不思議に見えました。復旧された気仙大橋を通ると、有名になつた「一本松」が見え、瓦礫の山と土台のコンクリートの跡が続く市街地を全員ボーゼンと見つめ、被災した市内最大のホテル跡を間近に見ながら、変わり果てた陸前高田の海や嘗ての堤防跡などを見学しました。その後被災したそのまの姿の旧市役所やお寺など見学しましたが参加者の多くは、8ヶ月以上も経た現在も復旧が進んでいない現状にびっぴりした様子でした。

市のボランティアセンターでは、土曜日ということもあり多くの人たちが詰めかけていました。（後で聞いた話では、770名）ボランティアセンターのスタッフは若者達が圧倒的に多かったのもび

つくりしましたし、これからの希望を感じさせてくれました。

そのスタッフが私たちのために用意してくれた内容は、教職員ということで津波の体験を話してくれる被災者の自宅周辺のガレキ処理や草刈りという粋な計らいでした。そしてその自宅のすぐ前が、3階まで波をかぶり全壊（建物は残存）した小学校だつたというのも感動した経験でした。被災された永田さんからは、当時の津波が押し寄せてきた状況やとて



ボランティアセンターに集まった人々

も人間の足では逃げ切れない速さの中で、多くの人達が避難しきれず犠牲になつたこと、今でもそのあたりでは行方不明者の遺体が残されている可能性があることを切々と話して頂きました。永田さん自身も家族を亡くされ、このような話ができるようになったのも最近のことだそうです。それでも隣の気仙小学校の生徒達は、間一髪先生の判断で山に逃げ全員助かつたことなどは、私たちの心に残つたお話でした。



被災した気仙小学校



ボランティアの仕事自体は、自宅の敷地の周りの草刈りや土の中に埋まっているガレキの処理という地味な仕事でした。しかし枯れた雑草の片づけや土の下を少し掘るだけで、材木や家の瓦とともに様々な生活用品、写真そして携帯電話まで中学生が掘り出し、被害の凄まじさを感じました。昼食後、皆が気になってい

た小学校の建物に見学に行きました。校庭は周囲から集められたガレキが山になっており、校舎の中は津波で壊され、流されてきた物や泥で被災当時のままの状況でした。ある教室の時計は地震があった時刻のまま止まっていたり、3月11日に書いた連絡がそのままであったことも衝撃でした。昼食を挟んで、約4時間程の活動でしたが、はつきりきれいになった場所を見て満足しました。「遺品」と思われるものは永田さんに託して帰路につきました。東北道に入る前に30分とった温泉で汗を流すことができたことがとても好評でした。

さらに後日、支部主催の「センセの学校」で参加した若い3人の教師が、現地の写真を上映しながら「ボランティア報



被災された永田さんより話を伺う



ボランティア作業の様子

総距離、約900km全所要時間25時間のボランティア活動でしたが、帰路のバスの途上感想を出し合いながら思いを共有しました。今回のボランティア活動の実施は、「被災地の実際を見てみたい」「自分たちも微力ではあっても何かできることをしたい」という組合員や教職員の願いに応えるなかでできたことでした。さらにこの活動を成功させるために、現地のボランティアセンターとの連絡や社会福祉協議会との調整や書類の手続きなど、支部の書記長や書記の仲間が周到な準備を万全に進めてきたこともふれておきたいと思います。当初の目標を上回る39名の申し込みがあったこと、そして中には、中学生も8名が親の承諾を取りながら参加するということもあり、何より事故やケガなく安全に行つて来ることが至上命題でした。そのために事前の行程表作りや防寒、安全対策などきつちりと進めてくれたメンバーには感謝の気持ちでいっぱいです。そして被災地の状況を見ながら、多くの仲間と貴重な時間を共有できたことが最高でした。

告」をして感想を述べてくれました。支部が若い教師との新たな結びつきを持ち、今後の活動に大きな可能性も広がってくれたのも今回の震災ボランティアの成果となりました。

次に参加者の感想を以下に紹介し  
す。

#### ・教職員

「今回大津波の爪痕を実際に見ることができて、改めてその破壊力の凄さを痛感しました。一瞬にして人も町も消えてしまうという、決してSFの世界ではない現実の世界での出来事に改めて驚かされました。さらに、今回かろうじて生き延びた被災者の方の生々しいお話やその被災体験から得た教訓的なお話を伺う機会が得られて、とても勉強になりました。

市役所跡や小学校跡を見学したときに、バラバラになったアルバム写真を見つけて、この人たちの日常や命が奪われてしまったのかと思うと、なんともやるせない思いになりました。今回の大震災では、我が家も屋根の軒が崩れてしまいました。8か月経って今月修理してもらうことができました。あのカレキの山を見て、復興までに何十年かかるに違

ないと思われました。まだまだ大変な道のりが待っており、決して他人事ではないと思われました。とても貴重な経験ができた一日でした。お世話様でした。」

#### ・中学2年生

11月25日、26日は、本当にお世話になりました。

今回のボランティアで、私はこの災害がどんなに凄いなものだったか、改めて体で感じました。バスから降りて、周りにカレキとさびた建物だらけの景色をみた時、涙がでました。

海をみると、何もなかったかのように、波があがっているのに、陸をみると、家がたくさんあったはずの場所に何一つなくて、これを見ていた人たちはどんな恐怖を感じていたのか、私には何も分かりません。分からないけど、精一杯ボランティアをして、ほんの少しでも岩手県を戻していきたいと思いました。

体育館より高く津波がきていたのは、正直信じられません。

少しほると、写真や野球ボール、ケイタイ、ビデオテープができてすごく怖い思いで、遺品を集めていました。

こんなことが分かったのも、佐藤先生のおかげです。

本当にありがとうございました。

#### ・中学3年生

まず意見としては、週末に行く弾丸ツアーなので、時間に追われていることが多かった。出発時間を、あと1〜2時間引き延ばしたら良いのではないのでしょうか。

感想としては、被災地の現状は、連日ニュースなどで放映していたため、どういう状態かある程度わかっていました。が、やはり自分の目で見る現状は、目を疑う光景でした。「ここに町があつて、人々が暮らしていたのだろうか。」と思いました。

ボランティア現場で地元の方の話を聞きました。「一人のお年寄りの方の命と、お年寄りを助けようとした5人の命は等価なのか。」というお話は、よく考えさせられました。確かに人を助けることは重要ですが、自分の命を犠牲にしてまでも助ける必要があるのでしょうか。しかも、知らない人を。

今後、このようなボランティアに行きたいと思います。その時は、よろしくお願ひします。